

『源氏物語』における音楽描写の意義

——夕霧と落葉宮の物語を中心として——

上 地 敏 彦

『源氏物語』において、音楽がその文芸的意義に深く関与していることは、山田孝雄博士が、「……これ（『源氏物語』）を芸術上の作品として見る場合には音楽の方面よりの観察が頗る重きをなすべきものにして決してこれを軽視すべからざるものなり。」と端的に述べておられるように、重要な事実であろう。そういう中で、男女の触れ合いの構想においては、とりわけ音楽が大きな意義を持たされている場合が少なくない。例えば、主人公光源氏が、琵琶や七絃琴の音に惹かれて、老女の源典侍や醜女の末摘花と契りを結んだり、箏・琵琶の名手だと聞いて明石上に求愛していること、或いは、薫が合奏の音に誘われて美姫大君・中君を見出し出していることなどもその例であるが、ここでは、落葉宮（朱雀院の女二宮）に対する夕霧の恋において、それを発展させる重要な契機として音楽が用いられているという事実を指摘したい。つまり、作者は、横笛巻において夕霧を落葉宮の琴の音の美に触れさせるという方法で、急速に彼の恋情を深化させ、まさにそのことを契機として、『横笛』までの夕霧とは全く趣を異にしている」と言われる夕霧巻における彼の積

極的な求愛の行動を描き得ている、ということについて論じたいと思ふのである。

○

論のはじめに、夕霧巻の冒頭にある次の一節に注目したいと思ふ。まめ人の名をとりて、さかしがり給ふ大将、この一条の宮の御有様を、なほ、あらまほしと、心にとどめて、おほかたの人目には、昔をわすれぬ用意に見せつつ、いと、ねんごろにとぶらひ聞え給ふ。したの心には、かくてはやむまじくなん、月日に添へて、思ひまざり給ひける。

（日本古典文学大系『源氏物語四』・九五頁）³⁾

柏木巻・横笛巻における夕霧と落葉宮の関わり合いを読み進めてきた読者が、鈴虫巻を隔てて、次に突然、このただならぬ気配の叙述に会うわけである。そして、これまで父の源氏とは対照的に、女性関係に聞き吉しい評判を立てることなく過ごしてきた、あの夕霧に、とうとう乱れる時がやってきたのかと思ひ至るのであるが、それに付けても、「かくてはやむまじくなん」云々——このまま、よそよ

そしい関係で終ってしまうことは堪えられないというような、かなりの切迫した感情にまで上り詰めている夕霧の落葉宮に対する恋心が、一体どこに由来するのかと思ひ起こした時に、すぐに浮かび上がってくるのが、ほかならぬ横笛巻において、宮が琴を奏でた場面なのである。この夕霧巻が、夕霧の全く上り詰めた恋情を前提として描かれていることは、やはり巻頭部分において、直接自ら声を聞かせることもない宮のかたくな態度に接し、遂に、

いかならむついでに、思ふことをも、まほにきこえ知らせて、
人（落葉宮）の御けはひを見むとおぼしわたる……（四九五）

と、積極的な行動の機会を待ち望むに至ったことが記された後、小野の山荘において夕霧がただひたすら求愛の行為へと突き進んでいくことからも明白なのであるが、ともかくも、まめ人・夕霧に、その特色を失わしめた強烈な恋の契機が夕霧巻以前に是非とも描かれていなければならず、それが、横笛巻において夕霧が宮の箏の音を聞き、想夫恋の曲を合奏した風流な秋の一夜であると思うわけである。このことは次の三点によって明らかであると考えるので、以下に順次説明したい。

- (1) 夕霧は音楽に造詣が深いと言え、そのため、落葉宮の高尚な琴の音の美をよく理解し、大きな感銘を受けていること。
- (2) 夕霧はかなり以前から妻雲井雁の無風流な点を不満に思い、風流・優雅な女性への憧れを強く心に抱いていること。
- (3) 物語中の諸例より、男性が女性の琴の音を聞くのは容易でないことが分るが、夕霧にしても、落葉宮の演奏をまったく思ひがけなく聞き得たのであるから、その点での感銘も当然強かるべきこと

と。

○ 柏木が他界して、その一周忌も過ぎ、「秋の夕の物あはれなるに」
（横笛・四六〇）閑居・一条宮を訪れた夕霧は、落葉宮の母御息所と柏木の思ひ出を語り合いながら、子だくさんの自邸の喧騒とはまるっきり別世界である、この閑静さと気品の高さに心惹かれ、加えて、彼の来訪直前まで合奏していた名残りの和琴の移り香にも感じ入る。さてそこで、

かやうなるあたりに、おもひのままなるすき心ある人は、しづむる事なくて、さまあしきはひをもあらはし、さるまじき名をも、立つるぞかし……
（横笛・四六一）

という夕霧の心中語が記されるのだが、これは、慎みのない好色家連中の浮名をも立てる行為などは、こういう情趣ある女人の館を舞台とするのだという、彼の一種夢幻的な気分の中の思いであり、ここには、一条宮の情趣に魅了されている夕霧の心境がよくうかがわれる反面、同時に、好色人を批評する、好色人ならぬ彼の心のゆとりも感じられるのである。ところが以下、和琴を奏でたり、御息所から、落葉宮の音楽の才能を父の朱雀院が高く評価していた話などを聞くと、夕霧は、宮にも演奏をすすめたりする。そして、彼女が箏の琴を奏で、それから想夫恋の曲を合奏するに至る経緯が、次のように描かれている。そこでは、夕霧のそのような心のゆとりというものは、跡かたもなく消え失せているのである。

（夕霧は和琴を）御簾のもちかく、おしよせ給へど、とみにしも、うけひき給ふまじきことなれば、しひてもきこえ給はず。

(中略) 風はだ寒く、ものおはれなるに誘はれて、(宮は) 箏の琴を、いとほのかにかき鳴らし給へるも、おく深きこゑなるに、(夕霧は) いとど、心とまりはてて、中々におもほゆれば、琵琶をとりよせて、いと、なつかしき音に、想夫恋をひきたまふ。「思ひおよび顔なるは、かたはらいたけれど。これは、こと問はせ給ふべくや」とて、せちに、箏のうちを、そそのかしきこえ給へど、まして、つつましきさしいらへなれば、宮は、ただ、物のみあはれと思しつづけたるに、(中略) 夕霧が和歌の贈答にからませて所望するので、とうとう宮は) ただ、すゑつ方を、いささかひき給ふ。(中略) あかすをかしき程に、さる、おほどかなる、物の音がらに、ふるき人の心しめてひきつたへける、おなじ調べのものといへど、あはれに心すごきもの、かたはしをかき鳴らして、やみ給ひぬれば、うらめしきまておほゆれど……

(横笛・埴六二一六三)

落葉宮の琴の技盤に關しては、「朱雀」院の御前にて、女宮たちのかやうの方は、おほめかしからずものし給ふとむむ、さだめ聞え給ふめりしを。」(横笛・埴六一)と記されているように、内親王の姉妹の中でも格別にすぐれていることが分るのであるが、若葉下巻でも、夫の柏木が、女三宮への恋に余念がない状態ながらも、落葉宮の「箏の琴、なつかしく弾きまさぐりておはするけはひ」には、「さすがにあてになまめかし」く感じざるを得なかったことが替かかれてゐる(三三七八)。一方、聞き入る夕霧は、父源氏に習った笛と琵琶とを得意とし、また、若葉下巻の六条院の女楽において、紫

上や女三宮等の演奏に細やかな感想を抱いている程、音楽の鑑賞能力にもすぐれているのである。その夕霧が、宮の音を「おく深きこゑ」と感じていることに注目したい。彼は、かつて柏木巻における一条宮訪問の際に、彼女を、「この宮こそ、聞きしよりは、心の奥みえ給へ。」(埴五〇)と評しているのだが、それと符合するのである。つまりは、夕霧好みの奥深い心ばえの反映した音色——。彼はすっかり心を奪われてしまい、短い演奏がもの足りなく、高ぶった気持のおさまりがつかなくて、今度はこともあろうに、女が男を恋うる曲・想夫恋を琵琶で弾き出し、亡き柏木にかこつけて、打って交った態度で宮に合奏を強引に催促するに至る。そして、和歌の贈答の儀礼にからませて、遂に、曲の終結部をわずかながらも弾かせることに成功する。この想夫恋の曲は、「平家物語」巻六における小督の話で有名であるが、「夜半の寝覚」巻四にも、寝覚上がひとり亡き夫を偲びながらこの曲を奏でているのを立ち聞きした主人公が、感動のあまり「わが身もうきたつ心地」して、堪え切れずに接近する場面があるように、男性にとつて、女性が想夫恋を奏でることは非常に魅惑的なのである。夕霧の場合は、とりわけ心深く染み入る「あはれに心すごき」美に感じ入っていて、最初と同様に短い落葉宮の演奏に対し、うらめしいばかりにも足りなく思っているわけである。このように、はじめ好色人のことなどを持ち出して邸内の情趣を味わっていた夕霧の気持のゆとりというものは、もはや跡かたもなく、彼は、すっかり落葉宮に心惑わされているのである。大体、ただただ物思いのみ沈んでいる宮にしつこく想夫恋の合奏を強いる夕霧の態度は、自ら好色人のふるまいを評した「さま

あしきけはひ」以外の何ものでもないのである。

以上、落葉宮の琴の音が夕霧の心を如何に感動させるものであつたかということ、場面に即して考察したわけであるが、その余韻は帰郷後の彼の心をも占めており、そのことから彼の感動の深さが知られるのである。夜更けて帰って来た夫に、雲井雁がやきもちを焼いてためき寝入りをするのをよそに、夕霧は、「妹とわれといふさの山の」(横笛・四六五)などと、催馬楽を口ずさんだり、こんな月のきれいな晩によく寝ていられるものだ……「あな、むもれや。」「あな、心憂。」(同)と声をかけたりで、一条宮で得たロマンチックな気分をあらわにしている。また、

君たちの、いはけなく寝おびれたるけはひなど、ここかしこにうちして、女房も、さしこみて臥したる、人氣にきははしきに、ありつるところの有様、思ひあはするに、おほくかはりたり。

(横笛・四六六)

と書かれているように、子供や女房達が所狭ましと臥せっているわが邸のけはいのにぎやかさに、あの閑静な風流の宿と比べて、何と違いがあるのだらうと思ったり、笛を吹きつつ、「いかに、名残もながめたまふらむ、御琴どもは、しらべかはらず遊びたまふらんかし。」「宮す所も、和琴の上手ぞかし」(同)などと思いをはせたり、更には、どういふわけで、あの柏木が宮に対し深い憎愛を持ち得なかつたのだらうかと思議に思ったり、などというように、一条宮に過したひと時の余韻が顯著に表われているのである。夕霧は、もはや完全に落葉宮への恋の囚人と化していると言えよう。

○

夕霧は、早くから雲井雁の優雅さに欠けた点に不満を抱いており、そのことが、琴の演奏に顯著にうかがわれる落葉宮の風流に彼が惹かれる大きな要因ともなっているのである。すでに、一条宮においても、また帰郷後にも、宮邸と自邸との比較をしている点に触れたが、帰郷後の浮かれた心を静めて夕霧が漸く寝つき、そして故柏木の奇妙な夢を見、それを幼な子の寝ぼけて泣き出した声に覺まされることが描かれた後に、次のような描写がある。

(雲井雁は) 御となぶらちかく取りよせさせ給ひて、耳はさみして、そそくりつくるひ、(若君を) いだきてゐたまへり。いとよく肥えて、つぶくと、をかしげなる胸をあけて、乳などくくめたまふ。

(横笛・四六七)

子だくさんの雲井雁が、品位の無さを象徴する「耳はさみ」をして、泣く子をあやし、なだめているのは、あたかも、帯木巻において左馬頭が良しとしなかつた「まめくしきすぢをたてて、耳はさみがちに、美相なき家刀目」(一六四)の体であり、ここでは、もはや邸内の情趣だけでなく、雲井雁と落葉宮の、女性としての魅力の差が、あからさまに問題となつているのである。

この妻をもの足りなく思う夕霧の心情については、若菜上・下巻を中心にして、義母の紫上との対比において、すでに何度か語られている。まず若菜上巻には、

(紫上は) 静やかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず、身をも、やむごとなく、心にくく、もてなし態へ給へる事と、見し面影も、わすれがたくのみなん、思ひ出でられける。我(が) 御北の方(雲井雁)も、あはれとおぼす方こ

そ深けれ、いふかひあり、勝れたるらうくしきなども、物し給はぬ人なり。(三〇二)

とあり、夕霧は、紫上の人格的な美点を思い、雲井雁の未熟な精神を嘆いているのである。ここで「見し面影」というのは、さかのぼって野分巻でもその粉れに紫上を垣間見た時のことを指し、実は、その折にも恋愛中の雲井雁が並べられているのだが、それは、心にかけて恋しと思ふ人(雲井雁)の御事は、さしおかれて、ありつる(垣間見た紫上の)御面影の忘れぬ……(三五〇)というものであり、作者は、すでにその野分巻あたりから、夕霧の心情に關して、紫上への傾斜と雲井雁よりの雌反というモチーフを打ち出しているわけである。

更に若菜下巻においても、光源氏主催の六条院における華麗な女樂の終了後に、そのような夕霧の思いが繰返し述べられている。

(紫上の)箏の琴の、かはりていみじかりつる音も、耳につきて、恋しくおほえ給ふ。わが北の方は(中略)をとこ君の御前にては、恥ぢてさらに弾き給はず、何事も、ただおいらかに、うちおほどきたるさまして、子どものあつかひを、いとまなく、つきくし給へば、をかしくもなくおほゆ。(三五五)

女樂における紫上の箏の演奏のすばらしかったことを思い出しつつ、雲井雁のおっとりとして育児に余念のない有様と対比する夕霧の心理がよく表われている一節である。このように、夕霧の紫上に對する憧れと、雲井雁に對する不満とは、かなり根深いものがあると言わねばならない。前者の方は、紫上が女樂後重病に陥ったことよって發展性を失うのであるが、後者の気持は当然残ってしまう

わけで、それが、横笛巻における落葉宮の音楽の風流に對して強い感銘を受けさせる要因となり、彼女に強く心を傾かせる心理的背景となつてゐることは明らかである。

上坂信男氏が、「現実の問題としても、折にふれ事にふれて催される詩歌管絃の御遊に琴の拙い女性は、たとえ入内しても帝の寵を期待することは困難になつただらう。」⁽⁷⁾と言われている如くに、平安朝貴族社会の女性にとつては、琴の技芸が不可欠の教養だつたわけであり、「みやび」は、まさに音楽と切つても切れない關係にあつたのであつて、そのような背景が、雲井雁・紫上・落葉宮三者における女性的魅力の問題において、端的に反映されているわけである。なお、「源氏物語」だけでなく、例えば「狭衣物語」などでも、今姫君の幼稚な性格が、琵琶の絃の張り方や弾き様によつて表現され(卷三)、彼女が、娘大君を狭衣帝の一宮に嫁がせたいと希望する際、「……(母君の)琵琶の音を、(大君は)ひきつたへてやあらん……」(卷四)と狭衣が問題にしないところに、女性の美に關わる音楽の意義が感じられると思つた。

夕霧は、落葉宮が箏を奏で出す前には、「御簾のものとちかく、(和琴を)おしよせ給へど、とみにしも、うけひき給ふまじきことなれば、しひてもきこえ給はず。」(横笛・鈿六二)とあるように、彼女が彈琴の所望に應じるとは全く思っていない状態であるわけだが、これは、男性が女性の琴の音を聞くことがどんなに容易なことではないかという感じを与える物語中の諸例を念頭に置いて読めば、ごく自然な心理であることに氣付くであらう。例えば、明石巻で、明

石上はすでに源氏と契りを結んでいながら、「この、常にゆかしがり給ふ、もの音など、さらに聞かせたてまつらざりつるを、いみじう恨み給ふ。」(八九)と記されているように、源氏の彈琴の所望に日ごろ全く応じず、別れに臨んで漸く箏を奏するのであり、すでに愛児のいる薄雲巻でも、「(源氏が)琵琶を、わりなく責め給へば、すこしかき合はせたる」(二二五〜二二六)という消極的な態度をとっている。また玉鬘は、源氏に庇護を受けていながら、「せちにきこえ給へど」(中略)ひが事にもやと、つつましくて、(和琴に)手触れ給はず。」(常反・四一九)というような状態であるし、真木柱の娘の宮姫君も、継父の按察使大納言との間で、「……せめ聞え給へば、くるしと思したる気色ながら、(琵琶を)爪弾に、いとよく合はせて、ただ少し、かき鳴らし給ふ。」(紅梅・四二四)と描かれているような具合である。更に、宇治大君・中君は、橋姫巻において、

「……「かき鳴らし給へ」と、(八宮が)あなたに聞え給へど、「思ひよらざりし独り琴を、聞き給ひけんだに、あるものを」「いと、かたはならむ」と、ひき入りつつ、みな、聞き給はず。たびたび、そのかしきこえ給へど、とかく聞えずすまひて、やみ給ひぬめれば、(薫には)いと、口惜しうおほゆ。」(四三三〇)

と描かれているように、父の八宮から促されても、薫に琴の音を聞かせようとするしない。中君の場合、宿木巻で、

(匂宮が)人、召して、箏の御こと取り寄せさせて、弾かせたてまつり給へど、(中略)つつましげに、手も触れ給はねば、「かばかりの事も、隠て給へるこそ、心憂けれ。(中略)かの君

(薫)に、はた、かうもつつみ給はじ、こよなき御中なめれば」など、(匂宮から)まめやかに恨みられてぞ、うち嘆きて、すこし調べ給ふ。」(四一〇四〜一〇五)

とあるように、匂宮に薫との関係を皮肉られて、波々所望に應ずる程である。「源氏物語」以外の作品を見ても、例えば「宇津保物語」には、月下の合奏を仲忠に立ち聞きされたことを知った世宮が、「なほ琴弾きつるは聞きつらむな。あなはつかしや。」(まじりの使巻)と赤面する場面が見られ、さらに、

「……ただこのこゑながら、この調の手を、とどめ給ふ手なく遊ばせ。(中略)と(朱雀帝が)のたまふ。北の方(俊蔭女)「さらに、(中略)琴とは何の名にか侍らむ、それをだにえ知り侍らぬに、あやしきこえさせけるかな」上「中略)かく辞し給ふこそはかなけれ。」(初秋巻)

というように、俊蔭女が朱雀帝からの彈琴の要請を極力拒む場面も見受けられる。また、『夜半の寢覚』には寢覚上に関して、

(内大臣は)さまざまにかぎりなく見奉り給に、上の、「御琵琶は、ひが事にもあらん」と、はつかしく思て、せめて弾きとどめ、几帳にすべりかくれ給ぬるを、(内大臣は)それをしもあかず思して……」(巻五)

と描かれる場面があり、『浜松中納言物語』には、唐后に因して、「……わが世のおもてをこそとおほして、えうしうのうちなるげらうと思はせて、琴を弾きて、この中納言に聞かせ給へ」と、(唐帝が)ねんごろに仰せらるるに、后いとあるまじき事とおぼしたる……」(巻一)

という描写、「狭衣物語」には、源氏宮に関して、

(狭衣は) 我も勾欄に寄りかかりて、笛を吹きつつ、そそのかし聞ゆれど、(源氏宮は)「同じさまに習ひしかど、殊の外なるを、なかなか耳馴らさじ」とにや、弾きすきみて(注・弾き捨てる)……(三)

(卷三)

という描写が見られる。このように、物語においては、女性が琴の音を、親密な者にせよ、貴顕にせよ、男性に対して聞かせることをこよなく恥じらうという描写が定型化されており、男性が女性の音楽美を享受することは至難とされているわけである。

さてそこで、夕霧と落葉宮の場合を考えてみると、別に男女の親しい間柄というのでもなく、また身分的にも下る夕霧の求めに応じ、宮がすなおに演奏することはまず有り得ないはずであって、夕霧が期待せず、強く促していないのは全く当然なことと云ってよい。ところがそれにも拘らず、ややあって宮は、「風はだ寒く、ものあはれなるに誘はれて」、自発的に傍の箏を奏で出しているわけである。従って、夕霧が、個人的に皇女・落葉宮の琴の音を全く思いがけなく聞いたという点において、如何に深い感動を覚えたかということを、よく推察することができよう。作者は、そのような夕霧の心に与える影響の大なるを期して、殊更、彼が落葉宮の弾琴を期待していないとし、殊更、宮が自発的に弾き出しているとしているわけである。

ただ、そうすると、落葉宮の行為には一体恥じらいの気持は無かったのかということが問題になる。実は、一条宮における落葉宮との対面後しばらくして、夕霧は父の源氏にその話をしているのだ

が、その折に源氏が、「かの、想夫恋の心はへは。げに、いにしへのためしにも、ひき出でつべかりける折ながら、女は、なほ、人の心うつるばかりのゆるよしをも、おぼろげにては、漏らすまじうこそありけれと、思ひしらるる事どもこそ、おほかれ。」(横笛・四七二)と、宮が想夫恋を合奏した行為を軽率だと批判するようなことを言っているのである。女は、男の気をそそるような情趣をいい加減なことで見せるべきではないという理由によってであるが、これは、すでに見たような、女性が男性に琴の音を聞かせることは極力慎むのが普通であるという事実と関連するのであり、源氏の感想は、要するに第三者がごく自然に抱くものであると言えよう。そうすると、そもそも夕霧に想夫恋合奏を強要させるきっかけとなった最初の箏の弾奏も、客観的には怪しい行為と見られかねないものということになるわけである。ところが、落葉宮の性格としては、夕霧送の大詰めに塗籠に籠るまでして最後の最後まで夕霧を拒み続けている態度に象徴的なように、丁度、いわけなきが強調されている異母妹の女三宮とは正反対に、思慮深く、しっかりしているという点が特徴的であるし、その弾琴の行為も、ものあはれなる折柄に加えて、夕霧と母御息所が亡き夫を追懐し合ったり、夕霧が亡き夫の愛用していた和琴を奏でたりする様子に、一顧自らの憂愁の思いを増長させられ、その発露をふと傍の箏に求めたといったところが内実であろう。すると作者は、決して軽率でない落葉宮を軽率だと第三者たる源氏に夕霧との対話の中で批判させざるを得ないような演奏の行為を描いているということになるわけである。すなわちそこには、何としてでも落葉宮の琴の音を夕霧に聞かせようとい

う作者の強い意図が感じられるのであり、それはまた、作者が、夕霧を感動させる素材として如何に音楽を重視しているかということを示すものにほかならないと思うのである。

以上、三つの角度から考察したところにより、横笛巻における落葉宮の琴の演奏が如何に夕霧を感動させるものであったかということを確認できたと思う。作者は、音楽を解し、風流な女性を憧憬する夕霧に対して、楽才豊かな落葉宮のすぐれた等の音を、しかも思いがけなく聞かせ、更には想夫恋を合奏させるといった、非常に周到かつ綿密な方法で以て、まめ人たる彼の心を強く揺り動かしているわけである。そして結局は、そのことを夕霧巻における「行動する夕霧」を描く原動力としているのである。つまり、夕霧巻の例の冒頭の一節に、「この一条の宮の御有様を、なほ、あらまほしく、心にとどめて」（宮の御様子をやっぱり理想的だと執心して）とあるのは、明らかに、その音楽中心の場面を踏まえて書かれているのである。その場面以前、二人の関わり合いの顕著なものは、柏木巻における夕霧の二度の一条宮訪問だけであり、二度目の折には、すでに触れた「この宮こそ、聞きしよりは、心の奥みえ給へ。」(四五〇)云々と、恋愛感情のはしりが見受けられるのであるが、しかし、そこから夕霧巻への飛躍は全く不可能なのである。かつて柏木や父の源氏の好色ぶりを、

……(柏木の女三宮への思慕は) いみじくとも、さるまじき事に心を乱りて、かくしも、身にかふべきことにやほありける。

(中略) さるべき、昔の契(り)といひながら、いと軽〜し

う、あぢきなきことなりかし……

(柏木・四四一)

(源氏が玉鬘と睡んでいるのを垣間見て) いで、あな、うたて。(中略) おもひよらぬ限なくおはしける御心にて、もとより、見馴れおほしたて給はぬは、かかる御思ひ、そひ給へるなめり。(中略) あな、うとまし…… (野分・四五八)

などと批判して、「まめ人の名をと」っていた夕霧が、今度は自ら浮名を立てるに至る必然性・合理性は、横笛巻の音楽の場面を通過してこそ納得がいくのである。

以上、「源氏物語」に描かれている幾多の男女の触れ合いにおいて、音楽がいろいろな意義深い役割を担っている事実の一例として、夕霧と落葉宮の関係の場を取り上げて論じた。まめ人・夕霧を模悪しく交際せしめている程に、作者・紫式部は、音楽が人間の心を与える絶大な影響力について熟知していたのである。

注

(1) 「源氏物語の音楽」(附9・宝文館、引用文は昭44発行の復刻版による)の自序。

(2) 秋山虔氏編「源氏物語必携」(昭42・学燈社)中「夕霧」・一七一頁。

(3) 以下、「源氏物語」本文の引用は、全て日本古典文学大系「源氏物語」一〜五(山岸徳平氏校注)に拠り、それぞれ(〜)と略記する。

- (4) 笛については、「……大将(夕霧)、たちどまり給ひて、御子のもち給へる笛(横笛)を取りて、いみじくおもしろく、吹き立てたまへるが、いと、めでたく聞ゆれば、いづれもく、みな、(源氏の)御手を離れぬ、もの伝へく、いと二なくのみある」(若菜下・(三)三五四～三五五)、琵琶については、「故六条の院(源氏)の御伝へにて、左のおとど(夕霧)なむ、この頃、世に残り給へる。」(紅梅・(四)二四〇)。
- (5) 「……(葉上の)和琴に、大将(夕霧)も耳とどめ給へるに、なつかしく愛敬つきたる御爪音に、ひき返したる音の、めづらしく今めきて……」(若菜下・(三)三四五)などの記述。
- (6) 阪倉篤義氏校注・日本古典文学大系「夜の寝覚」(昭47)・二九七頁。
- (7) 「物語序説」(昭42・有精堂)中「源氏物語序説」・二四五頁。
- (8) 二谷栄一氏校注・日本古典文学大系「狭衣物語」(昭48)・四五四頁。

玉鬘の人物像

源氏物語における玉鬘の登場の仕方は異色であり、興味深い。少

- (9) 原田芳起氏校注・角川文庫本「宇津保物語」上巻(昭44)・二六九頁。
- (10) 同右「宇津保物語」中巻・一五〇頁。
- (11) 注6に同じ。同書・三六八頁。
- (12) 日本古典文学大系77中の松尾聰氏校注「濱松中納言物語」(昭47)・一九八頁。
- (13) 注8に同じ。同書・一九一頁。
- (14) 横笛巻の対面以前に、落葉管が夕霧へ示していた反応は、柏木巻において、「ことならばならしの枝にならさなん葉守の神の許しありきと」(四四九)という夕霧の懸想めいた詠みかけに対し、従姉妹である少将君を介して、「かしは木に葉守の神はまさずとも人ならずべき宿のしづえか」(四五〇)という極めて淡泊な返歌をすることぐらいだったのである。
- (岡山大学大学院文学研究科)

久岡和恵

女卷末の八月、六条院が落成する。彼岸の頃に紫土をはじめとして、花散里・秋好が、神無月には明石上が引き移り、六条院は名実共に完成したのであるから、作者がここを舞台に、新たな物語世界